

6) 御蔵島のツゲ

Tsuge-Box-tree-in Mikura-jima

新藤 恵久
新藤 勝之

Shindo Yoshihisa, Shindo Katsuyuki

遠い古代から木の性質を熟知していた日本人は、ツゲ材が、粘りと適度の堅さがあるところから、古くから櫓、印鑑などに重用されてきた。さらに、義歯の床材料としても使われた。そこで、今回、ツゲの著名な産地の一つである御蔵島のツゲについて調査する機会があったので報告する。

御蔵島は、東京の南方海上約220キロに位置し、三宅島の東南18キロにある。本島は、直径約5キロのほぼ円形の崖絶壁に囲まれたコニーデ火山島で伊豆諸島中最古の島といわれ、全島ほとんど原生林で覆われ、自然植生が豊富に残っている。ツゲは全島の五分の四を占め、島の重要な財源となっている。

同島のツゲが文献に現れるのは江戸時代からで、同時代の初期から天領であり、三宅島の属島として三宅島地役人（代官手代）の管轄下にあった。

ところが三宅島の役人が御蔵島の神主印を勝手に使って私腹を肥やす不祥事が頻発し、享保年間には御蔵島のツゲの山を無断で借金の抵当にする事件まであった。

そこで三宅島からの分離独立運動がおこり、たまたま正徳四年（1714）、絵島生島事件に連座して御蔵島に遠島処分になっていた江戸城大奥典医奥山交竹院が独立運動に同情し、友人の幕府典医・桂川甫筑に島民の苦しい実情を訴えた。甫筑のお陰で享保10年（1725）島民の悲願は達成され、御蔵島は廻船を持つようになり、唯一の財源であるツゲを直接江戸に運べるようになった。

ところが江戸との交流による収入の安定は人口の増加をもたらし、扶持米制度が危機に瀕した。そこで二十八軒衆制度がつくられ、次男以下の分戸して妻帯することは禁止され、また冬季南郷に作られた出作小屋も28軒に独占された。この制度

は、明治30年代になって、養蚕による収入がツゲのそれを上回るまで堅持された。

同島のツゲは神の木と考えられていた。そこで神主が神意を奉じて毎年一定量ずつ伐り出した。伐り出しは全島民があたり、そこから得た収入は一定の比率で配分された。

現在、ツゲの植林も進められており、ツゲの加工品が島の村起こしの重要物産として脚光を浴びようとしている。

7) 歯科用蒸和ゴムの歴史について

On the History of Vulcanite Rubber

大垣女子短期大学 下総 高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's Junior College

1855年 Charles Goodyear は、生ゴム（カウチュック）に硫黄（S）を混合して、一定温度に加熱すると、ゴムが硬化する「蒸和法」を発見した。この硬ゴムの出現で、その応用は、医療用具、電気工学の方面へと拡大された。特に、ニューヨークの歯科医 Dr. Putnam 氏によって、蒸和ゴムを用いた義歯床がはじめてつくられ、歯科領域における画期的革命がもたらされた。

蒸和ゴムの歯科用途：主成分は、生ゴム1に対して1/2の配合を基材とし、これに補充材や着色顔料を添加したもので、その調製には十分な注意が払われた。

1) 床用：一般には、酸化鉄や辰砂を加えた強靱な「暗褐色ゴム」、「赤色ゴム」を用いた。特に上顎には、基材にアルミニウム粉末を加えて軽量にした、強靱で収縮性の少ない「ゴールドダストラバー」を用いた。下顎には、比重の大きい金属粉を混じて重くした「加重ゴム」を使用した。

2) 歯肉色ゴム：蒸和ゴムは光線を絶体に透過しないため、決して美麗ではない。他方、歯肉の色は個人差が多いため、審美的観点から注意が払われ、基材に酸化亜鉛や辰砂を加えることで、適宜に濃淡を調節したピンク色の各種類がつけられた。